

AIあれこれ 梅原ひろみ

「短歌研究」八月号に「歌人AI（人工知能歌人）の歌力」と題した座談会が掲載されていた。AIとの対話を通じて人の創造的な活動を支援したい、という理念に基づき「人に寄り添うキャラクターAI」の開発に取り組んできた民間企業が、歌人の野口あや子をコーチ役としてAI歌人を開発したという。目指すのは従来の一般的な応答型ではなく「予想外の応答を楽しんだり、育成する楽しみを味わってもらおう」AIで、人間の脳の働きを数学的に処理し模倣する技術で抽象的な情報を捉え、その場に即した応答を可能にするそう。今回の試みでは相聞歌に絞り、与謝野晶子はじめ女性歌人六名の歌を読み込ませている。AI作の歌から二首を引く。まあまあ作もなくはない、という段階のようだ。

- ・夕暮れの藪のかけすくほのあかり庭の桜の足もとにちる
- ・そばにいて春はさそはむうらうらと梢のさくら海見る夕

実は筆者自身は、AIが人間より良い短歌を作れるようになるかというテーマにはほとんど関心がない。私性の問題以前に、その背後に実人生を伴わない作品には今のところ興味がない。新奇な言葉の取合わせにその場限りの魅力はあっても、それだけのことと感ずる。座談会でも触れられているように、今後「AIに作らせて新人賞を取る」ケースも予想されるが、時代の波として、ある意味しかたがないのではないか。そうなってくればその時に

は、新人賞という形態が過去の遺物となつていくのかもしれない。一方、八月にスイスのジュネーブで一つの国際会合が開かれた。AIを搭載し、その判断で兵器自らが標的を選んで攻撃する「自律型致死兵器システム」の規制がテーマだ。「攻撃の決断の責任は人間が負う」などの基本的なルールが初めて定められたが、法的拘束力はない。米露など開発推進派は、高度なAI兵器によって誤爆や無差別攻撃が避けられると主張している。

この件に関し、八月二十五日付朝日新聞の社説に「殺し、傷つけることへの痛みを感じない兵器が生身の人間と交戦する」光景が現実のものになる、という気になる記載があった。社説の本旨からは少し逸れてしまふのだが、撃たれても痛みを感じないAI、ではなく「殺し、傷つけることへの痛み」である。なんと複雑なパラドックスを孕んだ表現だろう。生身の人間が標的を定め無人爆撃機で敵を殺傷するとき、それは「殺し、傷つけることへの痛み」を感じる人間が決めたが故に、まだ是、か。核のボタンを押した人間はどうか。その人物は別の場面で「殺し、傷つけることへの痛み」を感じるだろうか、まだマシ、となるだろうか。

より人間らしい複雑な思考のできるAI開発を目指しつつ、制御可能な範囲に留めたいという虫のよい話は成立しない。善悪は背中合せて存在するものだ。人の作り出したAIも例外ではない。

現時点でAIになく人間にあるものは、多様性や創造性であり、またその裏返しすの矛盾と混沌である。AIの「暴走」を抑えようと苦慮せねばならないまでにその技術を高めつつ、最も分らないのは人間自らの心の内であるという、どうしようもない事実を示すために、文学という領域はある。